

The world's educational system seen through my eyes

第3回

“国際派大和撫子”が伝える世界の教育現場

西浦みどりの「大学の窓から」



国立大学法人山口大学客員教授(国際関係・コミュニケーション)、国際コンサルタント・評論家(オペニオンリーダー)。東京生まれ、英国育ち。英国王立音楽院で学び、卒業後ソプラノ歌手として活躍したが帰国後引退。1986年より総理府のインタビューアとして政府広報に携わる。その後、インベスター・リレーションズと都市開発のコンサルティング会社設立。
http://www.nishiuramidori.com

フランス・パリ政治学院③

前 回、前々回に続き、今回がパリ政治学院に関する最後の記述となるが、同学院の独自性のメリット、スタンスについてまとめておく。

世界に誇れる人材を輩出し、その教授陣も輝かしい学者がひしめいているが、講師陣の中には学術界とは全く畑の違う世界で活躍する、ユニークな人も活用している。

例えば、金融界からはベ・エ・ヌ・ペーパーパリ銀行CEOのペロー氏だ。他にもそれぞれの分野で秀でていながら人生観も豊かであって、様々な国でも生活就労経験があり、それぞれの文化にも精通している、いわば人間として幅

も深みもありながら、思想行動においてハンドルも遊びとゆとりのある実社会経験者を講師に迎えていることだ。

そうすることによって、単なる学術的秀才を生むことだけに価値をおかず、社会に出てから世界中どこへ行っても何をしてもバランス感覚のある人間を育てることができるというわけだ。

しかし、それも全て頭脳あつてということではある。確かに、デコワン学長は、学院の一番の財産は頭脳だと言い切る。それは、教授の頭脳だけでなく、学生、研究者の頭脳もだ。地球上の各地から優れた教授・研究者・学生をいかに獲得するかが、学院の競争力だとも言う。前述のような成果があつたかどうかは読者各々の判断にまかせるが、参考までに各界の著名な出身者(卒業生)を一部紹介する。

ミッテラン、シラク元大統領、

ドビルパン元外相、ジョスパン、ジュベ、ファビウス元首相、トルドー元カナダ首相、レーニエ三世元モナコ公国大公、ビジネス界では元ルノーCEO・シュベゼール(シュバイツァー)氏など、一冊の本になるくらい星の数のごとくだ。

読者の多くは、なぜそこで著者が講師なのだ、世界の七不思議のひとつではないかと疑問を抱いていることと思う。しかし、そのことひとつを捉えても、大学全般の国際化を視野に入れ、いかにグローバル化をメリットに導いていくかという同学院の考え方や姿勢が明確だ。

あくまで学生に参考になる国際観があつて、国境を越えた独自のコミュニケーション術に長けていれば、女性、若年、学歴などは問題外。それよりも、現在、どのような姿勢で仕事をし、いかなる人間観を持って人生を歩んでいるかを評価したのだそう。わが国ではまずあり得ない。

そうしたユニークな人材を正しく評価して活用できるように、何年かかるであろう。